様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０１５０

研究課題名（和文）ピエール・クロソウスキーの作品における言語論の研究

研究課題名（英文）A study of language theory in the works of Pierre Klossowski

研究代表者
大森　晋輔（OMORI, Shinsuke）

東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：５０５９９２７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,400,000円、（間接経費）　420,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで申請者が行ってきたピエール・クロソウスキーの作品研究を「クロソウスキーの言語論」の研究へと統合する試みである。全ての作品を取り上げることはできなかったものの、この研究期間において、申請者は特に評論『わが隣人サド』のテクスト生成過程（1947/1967）におけるクロソウスキーの言語観の形成、およびこの作品をめぐるジョルジュ・バタイユとの思想的格闘を集中的に論じ、関連する二つの論文によって、大きく研究を前進させることができた。

研究成果の概要（英文）：This study consists of the integration of my previous studies on Pierre Klossowski into the study of his language theory. Although I could not analyse sufficiently all of his works, I coul d particulary treat the formation of his language theory in the generation process of "Sade, mon prochain" (1947/1967) and his relation with Georges Bataille over this work; through my two essays on this subject, my studies have made great strides forward.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：フランス文学　言語論　クロソウスキー　サド　バタイユ

１．研究開始当初の背景

ピエール・クロソウスキー（1905-2001）といえば、日本のみならずフランス本国においても、その思考の全容が解明されることなく「エロティシズムの作家」のようなステレオタイプ的な見方が独り歩きしている。特に、1970 年代以降彼が画家に転向したという経緯から「イマージュ（イメージ）の作家」と言ったような一面的なクロソウスキー理解が蔓延する傾向にあるが、こうした点に筆者は物足りなさを感じていた。また、バタイユ、ブランショといった同時代の作家たちと多くの問題意識を共有しつつも「シミュラークル（模像）」に関する議論などに独自の視点を持ち、たとえばドゥルーズやフーコーの思想に大きな影響を与えている重要な思想家であることはたびたび述べられてはいても、その文体の晦渋さや神学をはじめとする西洋思想の背景知識の膨大さから、そこから一歩踏み込んだ研究がなされてこなかった傾向がある。そこで、筆者は修士論文でクロソウスキーを取り上げて以来、一貫してクロソウスキーの言語観を探ることを自らに課してきた。というのも、一般に指摘されることは少ないが、彼の作品には言語に対する深い洞察が随所に見られるからである。

筆者のこれまでの研究の傾向は大きく二つに分けられる。一つは、クロソウスキーの主に 1950 年代から 60 年代にかけての著作（小説、評論、翻訳）に見られる言語観を扱うものである。浩瀚なニーチェ論『ニーチェと悪循環』、代表作とされる小説『歓待の掟』、古代ローマにおける神学と演劇の関係について考察したテクスト、ラテン語の統辞法にできる限り寄り添う形でクロソウスキーによって仏訳されたウェルギリウスの『アエネイス』などがこれまで扱った作品である。これらには、一般には非言語的なものと見られている要素（身体、情念、イマージュなど）へ言語の領域を限りなく肉薄させ、言語の限界を突破させるような言語の用い方や在り方への探究が見られる。

もう一つは、1970 年代以降顕著になるクロソウスキーの画業に関する研究である。上述した通り、彼は 60 歳代後半から 30 年間にわたり、絵画制作にその活動の軸を移したことから、その画業はその「言語への不信」や「イマージュの優位」の結果と関連付けて評価されることも多い。確かに一見、文学などの言語と視覚的なイマージュは相反するようであり、彼自身も言語を棄ててイマージュへと向かったかのような発言をしているのは事実であるが、ことはそれほど単純ではない。絵画制作に移行した後も、彼は自分の絵画が一種の記号概念、つまり分節言語とは異なる新たな言語体系（コード）に対する関心に基づいたものであることをはっきりと述べている（*La Ressemblance*, Marseille, André Dimanche, 1984 など）。その一例として、彼が絵画における記号としての紋切型（ステレオタイプ）の概念を積極的に評価している点、またみずからの絵を象形文字とのアナロジーで語っている点などが挙げられよう。ここでのクロソウスキーはその小説や評論に見られるように言語を非言語的要素へと近づけるのではなく、逆に非言語的要素を言語的なものへと近づけ、それによって両者それぞれの閉じた領域をもう一度相互に交流させようとしているのではないだろうか。絵画への専心は彼にとって「言語からイマージュへ」という単純な移行の結果ではなく、その言語観の一変奏として捉えることもできるのではないか。

以上の研究を通じて、筆者はクロソウスキー作品の多くが、その形式を問わず、独自の言語観の元で駆動していることを改めて確認した。彼が終生関心を失うことのなかった「伝達 communication」の概念との関連で上述した作品群を分析した博士学位論文は、筆者のこれまでの研究の一定の成果と言える。しかし、この論文では、主に彼の神学論、ニーチェ論、小説『歓待の掟』、翻訳、絵画制作活動をもとにして彼の伝達の概念の意義と射程を論じたものにとどまっており、これらを広く「クロソウスキーの言語論」として捉えた上で、その他の重要な作品についてもコーパスを広げることができるかどうかについては検証がやや不十分であった。中でも博士学位論文では十分に扱いきれなかったサド論『わが隣人サド』（1947/1967）、エッセイ『生きた貨幣』（1970）、小説『バフォメット』（1965）の三作品については、クロソウスキー作品全体をその言語論との関わりで読み解くには十分有効な対象であると考えられるため、それらの検討によって議論をさらに深化させることを筆者は考えていた。

２．研究の目的

クロソウスキーは言語的要素・非言語的要素（情念、身体、イマージュなど）のどちらに優位を置くこともなく、また両者を単に融合させることもなく、両者の距離や役割を保持した上で双方をより密に交流させようとしたのではないか。本研究の目的は、これまで筆者が十分に論じてこられなかった作品の検討を含めて「クロソウスキーの言語論」というテーマに統合する形で、この仮説をさらに精緻に検証することにあった。

３．研究の方法

筆者は研究期間内にこれまでの研究でまだ十分に扱うことができていないクロソウスキーの(1)わが隣人サド』、(2)『生きた貨幣』、(3)『バフォメット』の三作品を分析することで、クロソウスキーの言語観をさらに踏み込んだ形で問題にする予定であった。以下、それぞれについての方法と目的を述べる。(1)

再版時（1967）に付された「悪虐の哲学者」の読解と分析を通じ、ここで論じられているサドの言語思想、特にクロソウスキーがサドにおける「書く行為」をどう評価していたのかを明らかにする。(2)では資本主義社会における貨幣の交換と対比した身体の交換が提唱されるが、ここでは貨幣は言語のアナロジーとして捉えられている箇所が散見されるため、筆者はこの著作全体をクロソウスキーの言語論の一変奏として読む視点を導入し、クロソウスキーの思考における身体と言語の関係を探る。(3)は独自の神学観に基づき、時空を超えた幻想的世界が展開される小説であるが、それに加えて、古めかしい語彙や文法が多用されるなど、文体面でもきわめて特徴的な作品である。彼の手になる『アエネイス』の仏訳の場合と同様、これもクロソウスキーの重要な言語実践の一つであると位置づけ、その意義を検討する。以上三点の研究によって、筆者はクロソウスキーの言語観の射程がより明確に示されるという見通しを立てていた。

４．研究成果

この二年間で、前項の「３.研究方法」のうち、(1)『わが隣人サド』の分析に関しては、関連論文二本（次項の雑誌論文②④）、口頭発表一本（次項の学会発表③）をこなし、本研究課題の「クロソウスキーの言語論」についてさらに踏み込んで論じることができた。当初の予想以上の成果があったと言える。また、研究方法の(3)『バフォメット』の分析に関しても、関連論文（雑誌論文⑤）にすでにある程度の成果が示されている。ただ、当初予定されていた研究方法の(2)『生きた貨幣』の分析については、研究を進めてはいたものの、二年を通じて論文の形にまとめるには至らなかった。

とはいえ、本年 4 月にはクロソウスキー実弟の画家バルテュスの芸術観について、兄との比較で論じる機会を得、これにより、クロソウスキーの言語観にもつながる芸術観をも違った角度から論じることができた。さらに、本年 5 月に本研究課題と間接的に関わる発表（学会発表①）を行っており、「クロソウスキーの言語論」の研究は引き続き進展している。

また、平成 24 年度には、筆者のもう一つの研究分野である「文学と音楽」に関わるテーマで、書籍出版（図書③）一件、書評一件（雑誌論文③）、講演一件（学会発表②）をそれぞれ行った。また、博士論文およびその後の研究成果を総合的にまとめた書籍刊行の助成を得るため、平成 25 年 10 月に研究成果公開促進費「学術図書」枠で科学研究費の申請を行ったが、本年 4 月 1 日付で交付が内定した。『ピエール・クロソウスキー　伝達のドラマトゥルギー』のタイトルのもと、左右社より 9 月 30 日に刊行される予定である（図書①）。また、クロソウスキーの思想にも少なからず関連するフランスの哲学者ジャック・デリダの初の評伝の翻訳も 9 月をめどに刊行が予定されている（図書②）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

① 大森晋輔、「芸術の Y 字路：クロソウスキーとバルテュス」（査読なし）、『ユリイカ特集バルテュス――20 世紀最後の画家』、青土社、2014 年 4 月、215－221 頁

② 大森晋輔、「クロソウスキー『わが隣人サド』読解：そのテクスト生成過程に見られる言語概念の形成」（査読なし）、『思想』第 8 号、岩波書店、2013 年 8 月、138-155 頁

③ 大森晋輔、「作曲家の「声」：山田兼士『ドビュッシー・ソング・ブック』」（査読なし）、季刊『びーぐる：詩の海へ』、澪標、2013 年 7 月、109 頁

④ 大森晋輔、「バタイユとクロソウスキー：『わが隣人サド』をめぐって」（査読なし）、法政大学言語・文化センター紀要『言語と文化』第 10 号別冊、2013 年 2 月、209-226 頁 http://hdl.handle.net/10114/7743

⑤ 大森晋輔、「ピエール・クロソウスキー、または受肉せる霊／言語」（査読なし）、『別冊水声通信（セクシュアリティ）』、水声社、2012 年 7 月、311-325 頁

〔学会発表〕（計　3　件）

① 大森晋輔、「バタイユとクロソウスキー：『神の死』をめぐって」、バタイユ・ブランショ研究会、2014 年 5 月 24 日、お茶の水女子大学にて

② 大森晋輔、「音楽は詩にとってどこまで『他者』なのか？：ポール・ヴェルレーヌとその詩に付された音楽を例に」、清泉女子大学公開講座（秋のコース）第 31 回土曜自由大学「テーマ：音楽」、2013 年 10 月 26 日、清泉女子大学にて

③ 大森晋輔、「バタイユとクロソウスキー：『わが隣人サド』をめぐって」、法政大学言語・文化センター主催公開シンポジウム「欲望と表現：バタイユ没後 50 年　ポスト・バタイユ思想の展開」、2012 年 12 月 2 日、法政大学にて

〔図書〕（計　3　件）

① 大森晋輔、『ピエール・クロソウスキー伝達のドラマトゥルギー』、左右社より 2014 年 9 月 30 日刊行予定、総ページ数約 450（予定）。

② (翻訳) 原宏之・大森晋輔訳、ブノワ・ペータース著『ジャック・デリダ伝』、白水社より 2014 年 9 月刊行予定、総ページ数約 800（予定）。

③ 大森晋輔、『フランスの詩と歌の愉しみ』、東京藝術大学出版会、2012 年 9 月、総ページ数 92。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www1.ocn.ne.jp/~s-oomr/

６．研究組織
(1)研究代表者
大森 晋輔 （ OMORI, Shinsuke ）

東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：50599272

(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：